## HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

タイトル	真淵と宣長
著者	小野寺, 靜子; ONODERA, seiko
引用	年報新人文学, 9: 2-5
発行日	2012-12-20

## 真淵と宣長

## 小野寺 靜子

淵はその六年後没する。その年の一二月二八日、宣長は真淵の入門許諾を知らせる村田伝蔵の書状を受 研究に勤しみ、 という自説にそって、まず万葉集を明らかにすることを教え諭した。 伝えると、真淵は「古言を得たるうへならではあたはず、万葉をよく明らむるにこそあれ」(『玉勝間』) よって真淵の教えをうけることになる。古事記の注釈を書きたいと思っていた宣長はそのことを真淵に 新上屋を訪れ真淵と逢う。生涯に一度だけの二人の懇談であった。この時真淵六七歳、 に住む宣長と江戸に住む真淵と逢うことはかなわず、直接教えを受ける機会はなかった。宝暦一三年 (一七六三)二月、 真淵が田安宗武の命により大和・山城を訪れた復路の五月二五日、 宣長は真淵の旅宿 賀茂真淵の 翌明和元年(一七六四)一月、真淵に誓紙を届け正式に県門の一人となる。以降、 『冠辞考』を読んだ本居宣長は、 やがて三二年の歳月をかけて『古事記傳』を完成させる。『古事記傳』は現在でも古事 真淵の研究の深さを認識し敬慕の念を抱く。が、 その教えによって宣長は万葉集の 宣長三四歳、 宣長は書簡に 松阪

記研究上必見の書である

ことに張り合いを持ったにちがいない。 ら、この家で医者として病人を受け入れ、家族を養い、教えを乞い訪れる人々に講義を行い、 状況を宣長は至上の喜びとして研究に打ち込んだにちがいない。真淵もまた、出色の弟子を得、 三四歳で敬愛する真淵を師とし、 源氏物語などの古典研究や歌道、 本居宣長記念館の近くに移され保存されていた。 平成二三年一二月、私ははじめて松阪を訪れ、 古道についての書を著していたのかと思うと感慨深いものがあった。 教えに従い万葉集の研究に励み、 宣長ゆかりの地を探索した。宣長の家は松坂公園内の 宣長は医者を生業としながら研究に励 書簡で具体的な教えをうけるという んだのであるか 古

ことがずっと気がかりであったが、その書簡はどのようなものか確かめることもなく過ごしてきた。 初に訪れたころ期間限定で展示されていたものであることもわかった。 とができた。その書簡は明和三年(一七六六)九月一六日付けのもので、記念館所蔵ではないので私が最 に想像をめぐらせていたが、記念館に展示されていた真淵からのある書簡の激しい調子に驚いた。その 今年の九月、 伝説的な松阪の一夜によって県門の一人となりえた宣長を思い、私は二人の深く結びつい 再び本居宣長記念館を訪れ、このことについて館長・吉田悦之氏からご教示いただくこ た師弟関係

る 改めてその書簡を確認して私は次の部分に衝撃を受けたのであったことがわかった。 |長宛の書簡は「来簡集」として『本居宣長全集』別巻三(筑摩書房、 平成五年九月)に収められてい

上にても、言よろしく心高く調子を得たるは、少しも巧みの無ぞよき也、それにむかへてはよき歌 歌の事よろしからず候、既にたび~~いへる如く、 短歌は巧みなるはいやしといふは、

といへど巧み有はいやしき也、まして風姿にも意の雅俗にもかゝはらで、只奇言薄切の意をいへる

は惣て論にもたらぬ事也

歌うのは論ずるにたりない、という真淵の歌に対する考えを明確に示すものであった。 短歌は技巧に走っているのは取るに足りない、よい歌であっても同様で奇抜なことば、 薄っぺらい心を

どのような歌をめざすかについてはすでに二人には相容れないものがあった。 の詠歌の姿勢は中古の和歌の風雅さを重んじるものであった。一方、真淵は上古風をよしとする考えで. 何故歌を詠むのかという和歌の根本的な問題に対峙し、どのような歌を詠むべきかを示している。 (一七五一)に『栄貞詠草』として出しているし、宝暦八、九年ころには 真淵も宣長も歌人でもあった。宣長はすでに一九歳から二二歳にかけて詠じた歌を宝暦元年 またこの書簡中には、 『排蘆小船』で、歌とは 何 宣長

後小子に御問も無用の事也、 はばいまだ万葉其外の古書の事は知給はで異見を立らるゝこそ不審なれ、 ……惣而信じ給はぬ気顕はなれば、是までのごとく答は為まじき也 か様の御志に候はば向

か御心得候へ、

果という自負を持つから、異見を述べられるとそのような志でいるならばこれ以降私への質問は ともある。真淵の「万葉撰者巻の次第」についての見解は独特のものである。それはあまたの研究の結 無用で

ある、 しい言葉を発することになる。こうした激しさは真淵の宣長への期待の大きさでもあり、宣長に自説 ……信じない気がみえたら、これまでのように答えることはあるまい、そのように心得よ、と激

妥協しなかったけれど、 理解されない無念さのあらわれでもある。 真淵の学問の姿勢を学び古事記の世界観、

現代の私たちに問題提起をし続けている。

何を受け継ぎ、何を引き渡すのか、これは私たちの課題でもある。宣長は自分の詠歌や研究の姿勢は 源氏物語「もののあはれ」論など、

(おのでら せいこ・北海学園大学大学院教授